道徳部会

＜県研究主題＞
生きる力としての豊かな人間性をはぐくむ道徳教育の指導及び評価の工夫・改善

提案１　　提案者　東　克也（横浜市）

＜研究主題＞
子どもが主体的に自己を見つめ、よりよい生き方を学ぶための指導と評価の在り方

１　提案内容

本提案の内容項目２－（６）「感謝の心」については、総合的な学習や特別活動においても同時期に取り組むように別葉に記載し、意識的・計画的に授業がなされている。

（１）　ねらいとする価値　および　（２）　生徒の実態と指導の方向性

実践は、自分と身のまわりの数人が楽しければよいとする生徒の様子をふまえ、自分が他の人に支えられていることに気付き、また、感謝の気持ちをもってそれに応えようとする、このような道徳的心情を育てるねらいで行った。

（３）　資料と授業展開

文部科学省発行「私たちの道徳　中学校」より「帰郷」

主人公が故郷に帰り、故郷の人々の温かさにふれ感謝する内容の資料を使用した。導入ではねらいを敢えて伝えず、まず「あなたは１人でいきていけますか？」と発問することで今までの自分を振り返った。資料範読後はねらいに即した３つの発問をする中で、生徒と教員の対話形式で授業を進めている。週末には相田みつを氏の詩の内容を考え、余韻を残して授業を終えた。生徒へのフィードバックは、学級通信で行った。

２　協議内容

質問：「私たちの道徳」について、読み物資料は９つしかない。３年間使い続けるには計画的使用が必要。３年間の指導計画があれば教えてほしい。

答え：使い方は学年ごとにはっきり振り分けてはいない。横浜市独自の読み物資料もあるので、生徒にとって使いやすい方を選定するなどして併用している。学校や部会として使い方を精査している段階。

質問：１小１中で人間関係ができている中での道徳。やりやすさはどうか。

答え：生徒間でお互いのイメージが確定しているので、自分の意見を言いにくい場合もある。お互いの殻を破ってあげたいという思いは担任としてもある。

質問：導入には工夫が必要で、非常に大切なのはわかっているが単調になりがちで悩んでいる。提案では、教員と生徒の対話形式で授業が進んでいる。グループなど他のスタイルで行わないのか。行っているならばどのくらいの頻度で？

答え：基本は対話形式。グループにしてもどのように意見を共有させるかが難しい。また、生徒同士の話し合いだと時間配分が難しい。この兼ね合いをみながら今後工夫していきたい。

意見：導入の工夫として、行事や最近の出来事に絡めて話を始める。授業展開の工夫としては、二宮中は「あかつき」を使用。ついているワークシートの項目を減らし、使いやすくしている。それを学級通信で返したり、短くした時間の中で発表を行ったりしている。

意見：「私たちの道徳」の中の短い詩などを導入やまとめに使っている。中１くらいだと内容的に「私たちの道徳　小学校」が扱いやすい場合もある。

質問：読み物資料と言語活動の両立は時間の関係もあり難しい。しかし、書くだけでなく自分の気持ちを相手にどう伝えるか、それを育てることも大切。何か工夫があれば教えてほしい。

答え：小学校は書くより意見を聴く場面が多い。中学生になると意見の発表に抵抗を感じるようになる生徒もいるので、まず書かせてそれを読む形でよいから発表させると、意見が言いやすくなるのでは。

３　まとめ

道徳の教科化にむけ、横浜市では「道徳の授業の基本に立ち返ろう」「計画的に道徳の授業を進めよう」を念頭に研究を進めている。その中で、横浜版学習指導要領や横浜市中学校教育研究会道徳部会発行の学習指導過程を大切にしていきたい。ただ、学習指導過程は、あくまで基本形なので今回の協議の中ででたように教員と生徒の対話にこだわらず、グループやペアを活用した形態などの工夫が大切だと思われる。横浜版学習指導要領には、「基本的指導内容」と「実践に生かす指導内容」が明記されている。実践に生かす指導内容には、指導場面例が挙げてあるので、それを踏まえて総合的な学習の時間などとリンクさせることが大切である。

道徳の授業においては、本時の課題と生徒がこの授業で考えたことを一致させたい。そのために個々の意見の読み取りが大切になってくる。そのために、本提案では「授業と評価の一体化」として、生徒の意見をその場で読み取って授業の展開につなげていく、このための工夫が提案されている。具体的には、１つの授業を記録にとり、丁寧に振り返ることで、教員側が自分の授業の進め方を振り返っている。「この意見をこう振り返ればよかった」や「この生徒の意見の変容が読み取れる」など、自分で振り返っておけば、反省点をそれ以降の道徳の授業で生かすことができるだろう。

また、ワークシートにも工夫が見られる。発問を書かず、生徒があらかじめ内容を予測することができない形になっている。これは横浜市の教育課程でもでた話題であるが、よい工夫だと思う。

協議　「道徳の時間と日常との関わり」

４名１グループのワールドカフェスタイルで行った。約２０分ごとの３セット。

「日常」というキーワードから、様々な悩みや思い、取り組みが引き出され活発な協議が行われた。各グループからでてきた話題は以下のようになっている。

「家庭・地域との連携」「思いつきでなく、しかし効果的に道徳を進めるために年間計画が非常に重要」「生徒・クラスの実態をつかむため、教員の意識が重要」「私たちの道徳を３年間を通して活用することで、生徒の変容を見とることができる」「普段の生徒に道徳的な実践力をどうつけさせるか」「行事前の道徳をどのように行うか。事前学習にしてはいけないが、効果的に授業すれば行事をより深めることができる」

また、協議の柱にはなかったが、やはり道徳の教科化に向けて、評価について話題になっているグループもあった。

提案２　　提案者　小澤　美香（中地区）

＜研究主題＞
豊かな感性を育てる道徳教育
～資料の工夫と指導法について～

１　提案内容

秦野市道徳教育研究部会では、「道徳の時間」が生徒に「様々な考えを持つ人々が共存し、平和に生きる上で必要なルールやマナー」を考える機会となることを目的に、「豊かな感性を育てる道徳教育」をテーマと決め、「いじめ等の深刻な人権侵害を許さない『人権感覚』を育てる」と「『判断基準や価値意識の向上』を目指す」を２本柱で取組んできた。

（１）　秦野市内の取り組み

①　いじめ等の深刻な人権侵害を許さない「人権感覚」を育てる取組

まず、「生徒の心に響く資料の選定」をし、授業の際、いじめを深刻化させる無関心や傍観者の存在の恐さを知り、さらに自分の考えや行動について考えさせることに留意した。授業後、生徒の中に言葉かけ等の変化や、過去の自分を振り返り、これからの自分を考えるきっかけとなるという変容が表れた。しかし同時に、過去の辛い体験から被害者・加害者双方が不安定になることがあり、その不安を解消する環境をつくる手段として、生徒自ら動いて傍観者をなくす環境をつくる活動の必要性を感じた。

②　生徒の行動を決める際の判断基準や価値意識の向上を目指す取組

この取組では、モラルジレンマの資料を活用した。資料を扱う上で、生徒全員を話し合いに参加させる工夫として、自分や他者の意見・考えを視覚的に理解するのに有効なネームマグネットを使用し、その後、小集団に分かれて話し合い活動を行った。

この授業では答えを一つにまとめず、「参加した生徒一人ひとりが他の意見に耳を傾け、多面的にものを考えようとしているか。」「授業前よりよりよい考えを求めようとしているか。」というところに目的を絞った方がよい。

（２）　秦野市立北中学校の実践報告「いじめ防止プログラム」

第１学年の教育活動の中で、道徳教育が学校全体のさまざまな教育活動と連携し行われた例である。目的は「いじめに対し、いじめを許さず、かつ傍観者とならずにいじめを止めるために行動しようとする生徒を育てる」とした。道徳の授業をした後、全体集会で神奈川県警による「命の授業」をしてもらう。続いて、学年評議委員による「いじめを止めるロールプレイ」を行い「いじめ撲滅宣言」を出す、というものである。

（３）　研究の効果と今後の課題

①　効果的な「道徳の時間」にするための工夫

まずは、資料選定での工夫として、「心に響くものか」「共感できる悩みやジレンマを含むか」「新たな視点や知識を与える内容か」の３点の内１つ以上含むようにすることで生徒の反応が良いものになる。授業形態の工夫としては、生徒同士の話し合いを重視し、ネームマグネットの使用や「コの字型」「劇場型」など話し合いがしやすい形態をとった。まとめ方としては、自分の意見を持ち、その意見を述べ、他者の意見に耳を傾け、そこから自分の考えをまとめていくようにする。時間に限りがあるため１時間でできる範囲で考えていくことが望ましい。また、生徒の変容にあわせた効果的な実施時期、年間計画の必要性、他の教育活動との連携なども考えていく必要性がある。

② 今後の課題

「答えの予想できる授業」から他者の声を聞き、多面的に考え、「自分なりの答えを見つける道徳の時間」を目指すことが上げられる。また、情報発信という意味から、異動した先生からの新しい知識の発信などを有効に活用したり、教員同士お互いに授業を見合ったりするなど研究の共有も大切である。

2 協議内容

資料の選定や授業展開の工夫等について、自校での事例報告など参考になるものを出し合う

（1） 「いじめ」という命を扱う重いテーマにおいて、終末をどのようにおさえるべきか

・まず意見を言ってくれた生徒の勇気を褒め、生徒を批判や否定する語は禁句である。終末が教員の伝えたいことと、違う方へ進んだ場合は、伝えたいことを教員の言葉で、疑問形で投げかけていくようにする。マグネットで出てきた結果を教員間で共有し、思いも寄らない結果が出てきたときは教育活動の面でサポートしてもらう。

（2） 授業の工夫の一環として、ネームマグネットをどのように使用するか。

・道徳の授業に限らず、他の教科でも生徒の意見を知りたいときに活用する。道徳では、複数の意見（立場）に分けて少人数での話し合いの後、考えの変化等、生徒の変容を見るのに使用する。授業の最中に意見が変容した時は、様々な意見が出尽くし、話し合いが終わった時、各班の発表が終わった時などタイミングを見て変えてもいいようにする。

・ネームマグネットを使用し、意見の天秤が最初から一方に偏っているときは、クラスが不自然な状態（目に見えない力が働き、生徒の意見がコントロールされている）にあることを疑ってみる。そして、まずい状態を意識しながらもその結果を受け入れ、教員が反対意見を述べるなどして、他の意見を引き出すようにする。

（3） 道徳の授業は「個」を見つめていくものであり、出された意見をまとめることは必要か。少人数の話し合いで気をつけたいこと。

・少人数での話し合いは、道徳の授業に限らず、大勢の前で意見を出すことが苦手な生徒も発表しやすく、生徒の活発な意見を引き出すのに有効な手段である。ただ、班で出した意見をまとめることが目的ではなく、発表する際は、出た意見をすべて出すようにする。

・話し合い活動を成立させるには、道徳の時間のみでなく、普段からの積み重ねが大事である。また、グループ活動の仕方などリーダーの指導も心掛ける必要がある。

3 まとめ

（1） 資料の選定と収集について

資料を選択する際、自分の感性で選び実際に授業を行い、生徒がどの様に変容していったか、生徒の心に響く資料とはどういうものかを肌で感じられたのは成果として高く評価することができる。このような取組は貴重な財産となっていくと思われるので、是非継続してほしい。それと同時に、今ある資料「私たちの道徳」（３年後、選定される「教科書」）をうまく使い、生徒の心に響く授業のあり方を考えていく必要がある。

（2） 授業形態の工夫について

道徳に限らず、生徒の学力向上に関わっていく授業改善の取組の中で、従来の授業形態を見直していく必要がある。一斉授業から生徒が動く授業（＝アクティブラーニング）という授業形態の研究をこれからますます進めていく必要性があるだろう。道徳も含め「伝え合い、学び合う授業」へと、これから考えていかなければならないだろう。